



厚生労働大臣指定法人・一般社団法人

いのち支える自殺対策推進センター

いのち支える Japan Suicide Countermeasures Promotion Center (JSCP)

WHO発行

「自殺対策を推進するために 映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識」と最新の研究事例について

2024年11月8日（金）

広報官 伊江昌子

いのち支える自殺対策推進センター

Japan Suicide Countermeasures Promotion Center

「自殺対策を推進するために 映画制作者と舞台・映像関係者に 知ってもらいたい基礎知識」



「自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識」より引用 PDFはDL可能

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seika_tsuhogou/jisatsu/who_tebiki_film.html

「自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識」とは

- WHO発行「舞台・映像関係者向け」リソースブック
- 2019年に初めて発行され、2020年より日本語訳のPDFが厚労省サイトにて閲覧・DLできる。
- 36の研究結果を引用。
- 以下「WHOガイドライン」とする



PREVENTING SUICIDE: A resource for filmmakers and others working on stage and screen

<https://www.who.int/publications/item/preventing-suicide-a-resource-for-filmmakers-and-others-working-on-stage-and-screen>

より引用 PDFはDL可能

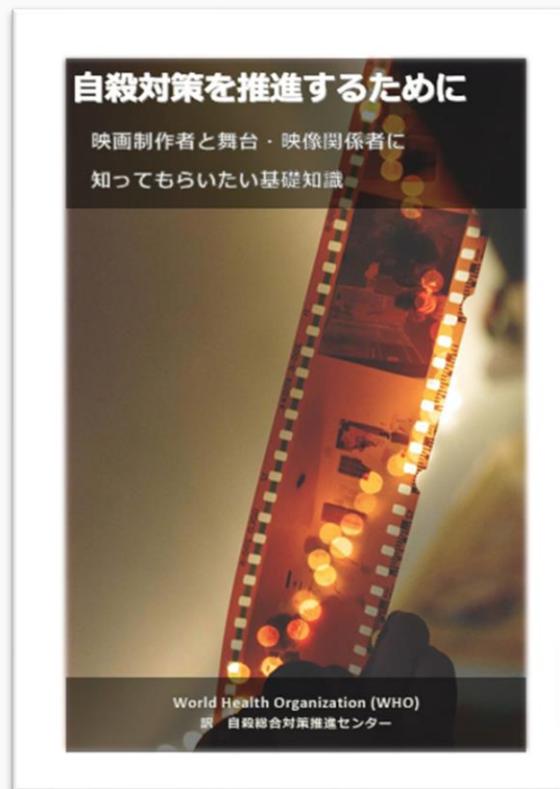
©2024 JSCP

「自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識」より引用 PDFはDL可能

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seika_tsuhoغو/jisatsu/who_tebiki_film.html

WHOガイドラインの目的

「本書は、映画制作者および映像・舞台作品の企画・制作関係者向けに情報を提供して、映像や舞台上で自殺を描写する場合は必ず正確かつ適切に行うようにし、また、**自殺描写が与える好ましい影響を最大化しつつ、悪い影響をすべて最小化することを目的としている。**」



PREVENTING SUICIDE: A resource for filmmakers and others working on stage and screen

<https://www.who.int/publications/item/preventing-suicide-a-resource-for-filmmakers-and-others-working-on-stage-and-screen> を参照 PDFはDL可能

©2024 JSCP

「自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識」を参照 PDFはDL可能
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seika/suhogo/jisatsu/who_tebiki_film.html

すぐわかる要点（12のクイック・レファレンス・ポイント）

- 困難な状況に屈しないことやそうした状況から立ち直る力（レジリエンス）、また効果的な問題対処の方法を示している人物や物語を取り入れること
- 支援サービスから援助を受ける方法の概要を示すこと
- 友人や家族などからの支援は重要な価値があることを示すこと
- 自殺の行為や手段に関する描写を避けること
- 現実に基づいてストーリーを展開させること
- 自殺の兆候となり得るものと、兆候にいかに対処すべきかを含めること
- 自殺の背景にある複雑な要因と広範な問題を示すこと
- 適切な言葉を用いること
- 自殺対策とコミュニケーションの専門家、精神保健の専門家、自殺関連の実体験者の助言を受けること
- 映画、テレビ番組、ストリーミング動画、演劇の開始前に注意喚起・警告のメッセージを挿入する必要があるかよく考えること
- 自殺の描写が舞台や映画制作に関わる者に与える影響を考慮すること
- 18歳未満の鑑賞者を対象とする作品では、保護者向けガイダンスを提供すること

12のポイントから「自殺の行為や手段に関する描写」に絞って紹介

- 困難な状況に屈しないことやそうした状況から立ち直る力（レジリエンス）、また効果的な問題対処の方法を示している人物や物語を取り入れること
- 支援サービスから援助を受ける方法の概要を示すこと
- 友人や家族などからの支援は重要な価値があることを
- **自殺の行為や手段に関する描写を避けること**
- 現実に基づいてストーリーを展開させること
- 自殺の兆候となり得るものと、兆候にいかに対処すべきかを含めること
- 自殺の背景にある複雑な要因と広範な問題を示すこと
- 適切な言葉を用いること
- 自殺対策とコミュニケーションの専門家、精神保健の専門家、自殺関連の実体験者の助言を受けること
- 映画、テレビ番組、ストリーミング動画、演劇の開始前に注意喚起・警告のメッセージを挿入する必要があるかよく考えること
- 自殺の描写が舞台や映画制作に関わる者に与える影響を考慮すること
- 18歳未満の鑑賞者を対象とする作品では、保護者向けガイダンスを提供すること

報道向けガイドラインでも「してはいけないこと」として強調

日本国憲法では「表現の自由」が 保障されています。

〔集会、結社及び表現の自由と通信秘密の保護〕

第二十一条 集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。

2 検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。

〔自由及び権利の保持義務と公共福祉性〕

第十二条 この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない。又、国民は、これを濫用してはならないのであつて、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負ふ。

「自殺の行為や手段に関する描写を避けること」

このガイドラインは「表現の自由」の
制約には当たらないのでしょうか？

なぜこのようなことがガイドラインで言及されるに
至ったのでしょうか？

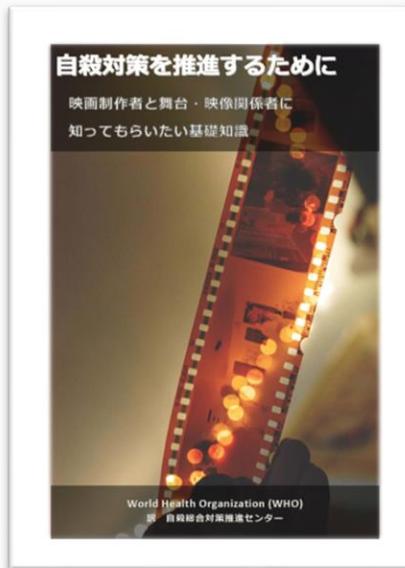
「自殺の行為や手段に関する描写を避けること」

WHOガイドライン P.8

「模倣行動の増加につながるため、自殺行為の描写は避けること。自殺後の遺体を見せることも避けるべきである。代わりに、故人の死について家族や友人が語る場面を入れることで、観ている側は、その人物が自殺で死亡した、あるいは自殺未遂となったことを理解できる。自殺の詳しい場面（具体的な手段等）を入れることも勧めない。」

P.14

「利用可能な文献の数は限られているものの、演劇における自殺描写もテレビ番組同様の影響をもたらし、上演後に自殺が増えるといった影響がみられることがわかっている。」



「自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってほしい基礎知識」P.8、P. 14 より引用
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seika_tsuhogu/jisatsu/who_tebiki_film.html

「自殺の行為や手段に関する描写を避けること」

ドラマが自殺者数や自殺未遂者数の
増加に影響したとみられる
具体的な作品事例を研究とともに3作品
をご紹介します。

① 6回シリーズのテレビドラマ： “Death of a Student” 『ある学生の死』（ドイツ）

- 作品に関する研究の概要
 - ✓ 上記連続ドラマの中で用いられた手段と、実際に発生した自殺の現象との間で関連があったことを示す研究（1988年）
- 関連するガイドラインP.14 **舞台および映像における自殺描写がもたらす悪い影響**
 - ✓ 「1988年、Schmidtke と Häfner は、フィクションの自殺描写が「ウェルテル効果」（メディア報道によって自殺率が上昇する効果）と同じ影響をもたらすという研究結果をまとめた論文を発表した。問題の作品は19歳の男子学生の自殺を詳細にわたって描いたフィクションで、1981年に週1回、全6話が放送され、1982年に再放送された。すると、自殺で死亡した主人公と最も近い年齢・性別グループで最も顕著に模倣効果がみられ、番組の影響は主人公と年齢が最も近いグループにおいて長期間にわたって続いた。」
- 研究の主な知見
 - ✓ 男子学生の鉄道自殺を描いた6話の連続ドラマで、模倣効果は年齢と性別が最も近い群で最も明瞭に観察された。
 - ✓ 最初のエピソードから最大70日間にわたって、鉄道自殺の数は15歳から19歳の男性で最も急増した（最大175%）
 - ✓ 前後の年と比較して、首吊りや飛び降りといったほかの手段による死亡は減少していない。テレビ番組の「鉄道自殺」を模倣することによって自殺者数が増加した可能性。

- 出典

『自殺対策を推進するために—映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識—』冊子の「参考文献」17ページに記載された23番文献：

Schmidtke, A., & Häfner, H. (1988). The Werther effect after television films: new evidence for an old hypothesis. *Psychological medicine*, 18(3), 665-676.

② 医療テレビドラマ：『Casually』（イギリス）

■ 作品に関する研究の概要

- ✓ 医療テレビドラマ『Casually』で薬物の過剰摂取が取り上げられたことが、実際の薬物の過剰摂取に影響を与えたかどうかの研究（1988年）

■ 関連するガイドラインP.14 舞台および映像における自殺描写がもたらす悪い影響

- ✓ 「同様に、薬物の過剰摂取を描いた医療ドラマの影響に関する研究では、放送後に服毒して病院に運ばれる人が著しく増加したことが分かっている。このケースでもやはり、薬物による自傷行為に及んだ登場人物と近い年齢層において増加傾向が見られた。」

■ 研究の主な知見

- ✓ 『Casually』では自分が操縦していた飛行機が墜落し、同僚が死亡したため仕事に復帰できず悩む30代の英国空軍パイロットが、悩みから2日間で50錠の「アセトアミノフェン（ドラマ内ではparacetamol）」を飲み、病院へ搬送されたエピソードが放送された。
- ✓ 放送後に、服薬による救急外来受診が17%増加、2週目は9%増加した。「アセトアミノフェン」過剰摂取の増加はほかの薬物よりも顕著だった。
- ✓ 放送の翌週に受診し、インタビューを受けた32人の患者がこのエピソードを見ており、20%が過剰摂取を決意する上で影響を受けたとし、17%が摂取する薬物の選択に影響を受けた。

■ 出典

『自殺対策を推進するために—映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識—』冊子の「参考文献」17ページに記載された18番文献：
Hawton, K., Simkin, S., Deeks, J. J., O'Connor, S., Keen, A., Altman, D. G., ... & Bulstrode, C. (1999). Effects of a drug overdose in a television drama on presentations to hospital for self poisoning: time series and questionnaire study. *Bmj*, 318(7189), 972-977.

③ Netflix配信連続ドラマ（13話）“13 Reasons Why” 『13の理由』

- 2007年の小説を原作とするこのシリーズは、セレーナ・ゴメスが総指揮として話題になる。2017年Netflixで最も視聴されたドラマの一つ。
- 女子高生が自殺に至るまでの出来事が、彼女が残したカセットテープを通じて回想される。物語の中で、性的暴行、薬物乱用、いじめ、自殺、銃による暴力などが描かれる。
- 主人公ハンナが自宅の風呂場で手首を切って自殺するシーンが描かれた。（原作には手首を切る描写はなく「錠剤による自殺」が仄めかされている）



『13の理由』 ジェイ・アッシャー作
武富博子翻訳
講談社 2009年3月25日 第1刷発行

WHOガイドラインで“13 Reasons Why” 『13の理由』に言及した箇所

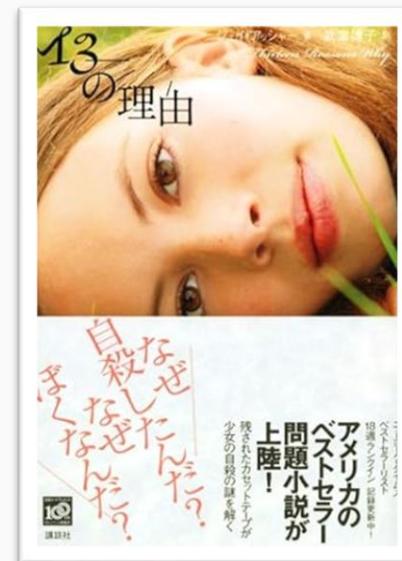
■参考文献 9、13、32、33

アメリカ：Netflixで2017年に公開されたドラマシリーズ『13の理由』が与えた影響に関する研究。

ガイドラインP.14

舞台および映像における自殺描写がもたらす悪い影響

「自殺シーンが描かれているシリーズ番組のオンライン配信に関する研究では、番組配信が自殺の増加のみならず、自殺未遂や自殺念慮で小児病院に運ばれる若者の増加とも関連性があることが示された。番組の配信開始から6カ月間遡って小児患者のカルテを調べたところ、多くのカルテ（主に精神保健に関する診察のカルテ）でこの番組が言及されていた」



『13の理由』 ジェイ・アッシャー作
武富博子翻訳
講談社 2009年3月25日 第1刷発行

■ 出典 『自殺対策を推進するために—映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識—』冊子の「参考文献」16、17ページに記載された文献：

9. Plager P, Zarin-Pass M, Pitt MB. References to Netflix' "13 Reasons Why" at clinical presentation among pediatric patients. J Child Media. (<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/17482798.2019.1612763>, September 2019). 2019;13(3):317-27. accessed 7

13. Niederkrotenthaler T, Stack S, Till B, Sinyor M, Pirkis J, Garcia D et al. Association of increased youth suicides in the United States with the release of 13 Reasons Why. JAMA Psychiatry. 2019.

32. Bridge JA, Greenhouse JB, Ruch D, Stevens J, Ackerman J, Sheftall AH et al. Association between the release of Netflix's 13 Reasons Why and suicide rates in the United States: an interrupted times series analysis. J Am Acad Child Adolesc Psychiatry. 2019.

33. Cooper MT Jr, Bard D, Wallace R, Gillaspay S, Deleon S. Suicide attempt admissions from a single children's hospital before and after the introduction of Netflix series 13 Reasons Why. J Adolesc Health. 2018;63(6):688-93.

“13 Reasons Why” 公開後に起こったこと

- 米児童青年精神医学会(AACAP) や国際自殺予防学会 (IASP) をはじめとする欧米各国の24の団体が連名で、Season 2 発表時にこのドラマの視聴に関し、注意喚起の声明を発出。

「世界中の団体がNetflixに対し、このシリーズに含まれる多くの困難な問題を責任を持って取り扱うよう要請しました。研究により、暴力や自傷の描写は模倣行動の可能性を高めることが示されています。」

https://www.aacap.org/App_Themes/AACAP/Docs/latest_news/2018/13_Reasons_Why_SOE.pdf

- 2019年4月米国国立精神衛生研究所 (NIMH) がプレスリリース
 - 同番組の公開後の1か月間 (2017年4月) に、米国の10歳から17歳までの若者の自殺率が28.9%増加したことと関連があった。
 - 番組が配信された2017年4月1日から12月31日までの間に、195件の自殺死亡者の超過が推計されると報告。

<https://www.nimh.nih.gov/news/science-news/2019/release-of-13-reasons-why-associated-with-increase-in-youth-suicide-rates>

Netflixと制作チームのその後の対応

- シーズン2公開前に、Netflixはキャストからのメッセージ、相談窓口などの情報、15歳未満の視聴を避ける注意喚起情報等を発表。シリーズ冒頭に演者からの注意喚起メッセージを挿入。<https://www.wannatalkaboutit.com/jp/13-reasons-why/>
- 2019年7月プロデューサーのブライアン・ヨーキー氏が、Season1で、主人公が自殺する3分間のシーンをカットし、再編集することを発表した。
- 13 Reasons Why 公式Xの投稿より引用。

「シーズン1で自殺の醜く、辛い現実をこれほど生々しく詳細に描いたのは、そのような行為の恐ろしさについて真実を伝え、決して真似をしようと思わせないようにするためでした。しかし、シーズン3の公開を目前に控え、アメリカ自殺予防財団のDr.クリスティーン・ムティエをはじめとする方々から、そのシーンに対する懸念の声が寄せられました。私たちはNetflixと協議し、そのシーンを再編集することに同意しました。番組の命ともいえるメッセージ、すなわち、お互いをもっと大切にしなければならないというメッセージよりも重要なシーンはありません。この編集により、特に傷つきやすい若い視聴者に対するリスクを軽減しながら、より多くの人々にとって番組が最も有益なものになることを私たちは信じています。」

(太字はJSCP) <https://twitter.com/13ReasonsWhy/status/1150987786243018752>

- 現在Season 4 まで制作されている。

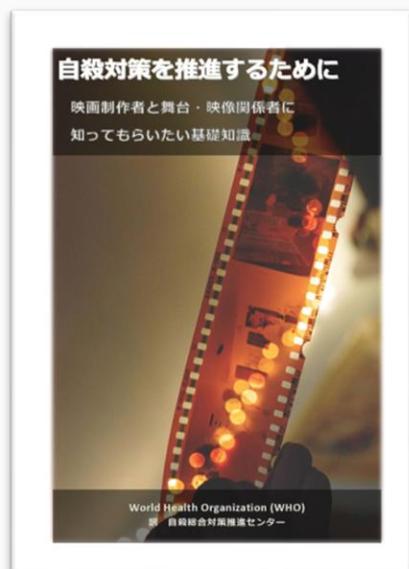
(再掲) 「自殺の行為や手段に関する描写を避けること」

WHOガイドライン P.8

「模倣行動の増加につながるため、自殺行為の描写は避けること。自殺後の遺体を見せることも避けるべきである。代わりに、故人の死について家族や友人が語る場面を入れることで、観ている側は、その人物が自殺で死亡した、あるいは自殺未遂となったことを理解できる。自殺の詳しい場面（具体的な手段等）を入れることも勧めない。」

P.14

「利用可能な文献の数は限られているものの、演劇における自殺描写もテレビ番組同様の影響をもたらし、上演後に自殺が増えるといった影響がみられることがわかっている」



「自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってほしい基礎知識」P.8、P. 14 より引用
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seika_tsuhogu/jisatsu/who_tebiki_film.html

12の要点（映像制作者と舞台・映像関係者向け）

- 困難な状況に屈しないことやそうした状況から立ち直る力（レジリエンス）、また効果的な問題対処の方法を示している人物や物語を取り入れること
- 支援サービスから援助を受ける方法の概要を示すこと
- 友人や家族などからの支援は重要な価値があることを示すこと
- **自殺の行為や手段に関する描写を避けること**
- 現実に基づいてストーリーを展開させること
- 自殺の兆候となり得るものと、兆候にいかに対処すべきかを含めること
- 自殺の背景にある複雑な要因と広範な問題を示すこと
- 適切な言葉を用いること
- 自殺対策とコミュニケーションの専門家、精神保健の専門家、自殺関連の実体験者の助言を受けること
- 映画、テレビ番組、ストリーミング動画、演劇の開始前に注意喚起・警告のメッセージを挿入する必要があるかよく考えること
- 自殺の描写が舞台や映画制作に関わる者に与える影響を考慮すること
- 18歳未満の鑑賞者を対象とする作品では、保護者向けガイダンスを提供すること

すぐわかる要点（12のクイック・レファレンス・ポイント）

- 困難な状況に屈しないことやそうした状況から立ち直る力（レジリエンス）、また効果的な問題対処の方法を示している人物や物語を取り入れること
- 支援サービスから援助を受ける方法の概要を示すこと
- 友人や家族などからの支援は重要な価値があることを示すこと。
- 自殺の行為や手段に関する描写を避けること
- 現実に基づいてストーリーを展開させること
- 自殺の兆候となり得るものと、兆候にいかに対処
- 自殺の背景にある複雑な要因と広範な問題を示すこと
- 適切な言葉を用いること
- 自殺対策とコミュニケーションの専門家、精神保健の
- 体験者の助言を受けること
- 映画、テレビ番組、ストリーミング動画、演劇の開始前に注意喚起・警告のメッセージを挿入する必要があるかよく考えること
- 自殺の描写が舞台や映画制作に関わる者に与える影響を考慮すること
- 18歳未満の鑑賞者を対象とする作品では、保護者向けガイダンスを提供すること

自殺リスクを軽減する
「パパゲーノ効果」
に関連

すぐわかる要点（12のクイック・レファレンス・ポイント）

- 困難な状況に屈しないことやそうした状況から立ち直る力、また効果的な問題対処の方法を示している人物や物語を題材にすること
- 支援サービスから援助を受ける方法の概要を示すこと
- 友人や家族などからの支援は重要な価値があることを示すこと
- 自殺の行為や手段に関する描写を避けること
- **現実に基づいてストーリーを展開させること**
- **自殺の兆候となり得るものと、兆候にいかに対処すべきかを含めること**
- **自殺の背景にある複雑な要因と広範な問題を示すこと**
- **適切な言葉を用いること**
- 自殺対策とコミュニケーションの専門家、精神保健の専門家、自殺関連の実体験者の助言を受けること
- 映画、テレビ番組、ストリーミング動画、演劇の開始前に注意喚起・警告のメッセージを挿入する必要があるかよく考えること
- 自殺の描写が舞台や映画制作に関わる者に与える影響を考慮すること
- 18歳未満の鑑賞者を対象とする作品では、保護者向けガイダンスを提供すること

取材・シナリオ 制作・演出に 関わる内容

すぐわかる要点（12のクイック・レファレンス・ポイント）

- ・困難な状況に屈しないことやそうした状況から立ち直る力（レジリエンス）、また効果的な問題対処の方法を示している人物や物語を取り入れること
- ・支援サービスから援助を受ける方法の概要を示すこと
- ・友人や家族などからの支援は重要な価値があることを示すこと
- ・自殺の行為や手段に関する描写を避けること
- ・現実に基づいてストーリーを展開させること
- ・自殺の兆候となり得るものと、兆候にいかに対処するかを示すこと
- ・自殺の背景にある複雑な要因と広範な問題を示すこと
- ・適切な言葉を用いること
- ・自殺対策とコミュニケーションの専門家、精神保健の専門家、自殺関連の実体験者の助言を受けること
- ・映画、テレビ番組、ストリーミング動画、演劇の開始前に注意喚起・警告のメッセージを挿入する必要があるかよく考えること
- ・自殺の描写が舞台や映画制作に関わる者に与える影響を考慮すること
- ・18歳未満の鑑賞者を対象とする作品では、保護者向けガイダンスを提供すること

視聴者・演者・スタッフのメンタルヘルスに関わる内容

日本国憲法では「表現の自由」が 保障されています。

〔集会、結社及び表現の自由と通信秘密の保護〕

第二十一条 集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。

2 検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。

〔自由及び権利の保持義務と公共福祉性〕

第十二条 この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない。又、国民は、これを濫用してはならないのであつて、常に公共の福祉のためにこれを利用する責任を負ふ。

「自殺の行為や手段に関する描写を避けること」

このガイドラインは「表現の自由」の
制約には当たらないのでしょうか？

なぜこのようなことがガイドラインで言及されるに
至ったのでしょうか？

コンテンツ視聴スタイルの変化と研究でわかってきたこと

映画やテレビ番組や、舞台映像はネットでの配信が前提となり、いつでもどこでも何度でも見ることができるようになり、自殺に関する用語の検索も容易になった。

脆弱な状態にある人や、影響を受けやすいとされることも・若者が自殺シーンに触れ、強い刺激を受ける可能性があることが研究からわかってきた。

一方で、自殺の危機を乗り越えることに重点を置いた描写は、鑑賞者の自殺リスクを低減することもこれまでの研究から分かっている。（「**パパゲーノ効果**」）

日本のコンテンツは人気があり、世界中で視聴されています。

今後「自傷・自殺」を描く作品に関わることがあるかもしれません。

「ガイドラインに書いてあるから」という
べき論ではなく

「自殺・自傷」をドラマの中で描いた
勝田さん・後藤さんのお話を伺いながら
「表現の自由」とのバランスを
皆さんとともに考えていきたい。

【参考資料】

「ウェルテル効果」とは

メディアが有名人などの自殺をセンセーショナルに報じた後、自殺者数が増える現象。1774年にゲーテが出版した『若きウェルテルの悩み』に由来する。

主人公のウェルテルは愛が実らず失意に陥り自殺することになるが、その後、ヨーロッパ各地でこの本を読み影響を受けた若者が、ウェルテルと同じ方法で相次いで自殺する現象が起きた。米国の社会学者、Phillipsはこの現象を「ウェルテル効果」と名付けた。

「1988年、SchmidtkeとHäfnerは、フィクションの自殺描写が『ウェルテル効果』と同じ影響をもたらすという研究結果をまとめた論文を発表した。」*

* 「自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識」

P14 および参考文献より

23 Schmidtke A, Hafner H. The Werther effect after television films: new evidence for an old hypothesis. Psychol Med. 1988;18(3):665-76.

「パパゲーノ効果」とは

メディア報道が自殺を抑止する現象。モーツァルトのオペラ『魔笛』の登場人物であるパパゲーノにちなみ、名付けられた。オペラの中でパパゲーノは、愛する恋人を失った喪失感や絶望により自殺を決意するが、あることをきっかけに自殺を思いとどまる。

危機を克服した人を描くことが自殺リスクの高い人に有益な影響を与える可能性があることも研究から明らかになっている。 *

2010年、ウィーン医科大学のトーマス・ニーダークロテンターラー（Thomas Niederkrotenthaler）らによって提唱された。

* 「自殺対策を推進するために映画制作者と舞台・映像関係者に知ってもらいたい基礎知識」 P.15および参考文献より

5. Andriessen K, Krysinska K. The portrayal of suicidal behavior in police television series. Arch Suicide Res. 2019;23(3):1-15.

6. Till B, Strauss M, Sonneck G, Niederkrotenthaler T. Determining the effects of films with suicidal content: a laboratory experiment. Br J Psychiatry. 2015;207(1):72-8.

35. Niederkrotenthaler T, Voracek M, Herberth A, Till B, Strauss M, Etzersdorfer E et al. Role of media reports in completed and prevented suicide: Werther v. Pa-pagano effects. Br J Psychiatry. 2010;197(3):234-43.

参考：「自死」「自殺」の表現に関する議論について



JSCP作成

『自死遺族等を支えるために 総合的支援の手引（改訂版）』より

「自死」「自殺」の表現については、自死遺族等や自死遺族等支援に携わる関係者の間でも多様な考えや思いがあります。「自らを殺したのではなく、死に追いやられたのであるから、自死という用語を使いたい」「殺という言葉に抵抗を感じる」など、「自殺ではなく、自死という用語を使うべき」という意見がある一方で、「社会から殺されたのだから、自殺という用語を使いたい」「自殺を自死に言い換えられると、まるで自分の家族が自殺という悪い亡くなり方をしたから言い換えられているのだと感じ、悲しくなる」など、「自死ではなく、自殺という用語を使うべき」という意見もあります。さらには、「自死、自殺、いずれの用語も受け入れがたい」といった意見もあります。本手引の作成においても、検討時間が限られた中、有識者会議の場で活発な議論が行われました。

以下に示したものは、様々な意見がある中で、現段階における使い分け方として、本手引において用いることになったものです。なお、有識者会議における「自死」「自殺」の表現に関する議論についての詳細は、JSCPホームページを参照ください。https://jscp.or.jp/izoku_support/handbook2024.html

(1) 自死、自殺の使い分け

- 法令や医療などに関する用語・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 自殺（例：自殺対策、自殺未遂）
- 身近な人を自死・自殺で亡くした人や子どもなどに関する用語・・・ 自死（例：自死遺族等支援）
- そのほかの用語・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 自死・自殺（例：自死・自殺で亡くなった）

(2) 自死遺族等

本手引において「自死遺族等」とは、主に以下の身近な人の自死・自殺により影響を受けた、または受ける可能性のある人を指します。

例：親族（血族、姻族）、内縁関係にある人、婚約者、友人、同僚など

(3) 自死遺児等あるいは身近な人を自死・自殺で亡くした子ども

本手引において「自死遺児等」「自死・自殺で身近な人を亡くした子ども」とは、主に以下の身近な人の自死・自殺により影響を受けた、または受ける可能性のある子どもや若者を指します。

例：保護者やきょうだいなどの親族や友人を亡くした子ども、若者（小、中、高、大学などに通う年齢層） など